あくま（悪魔）☆DE☆元人間

凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あくま（悪魔）☆ＤＥ☆元人間

【Ｎコード】
Ｎ５７６６Ｕ

【作者名】
凪

【あらすじ】
駅のホームに向かう途中の階段で足を掛けられ階段から落ちて死亡した俺、片桐（かたぎり）駆（かける）。
死んでしまった俺はさっさと転生出来る筈だったんだが一人の神のせいで俺の転生する筈だった体は跡形も消滅。さらに転生が不可能と言われ、思わずその神をぶん殴ってしまい、罰として悪魔として転生させられてしまった。しかも記憶を残したまま。
どうなる！？俺の人・・・魔生！？

俺死亡、神界にて・・・１（前書き）

７月１０日　アルミナの口調をちょっと変えました。

俺死亡、神界にて・・・1

俺は片桐（かたぎり）　駆（かける）１７歳。

目を覚ますと綺麗な川と花畑、そして恐ろしく長い長蛇の列と綺麗な女性が目に入った。

「え～と、片桐　駆さん。で、よかったですか？」

「そうだけど・・・ここは？」

「ここは死んだ魂を扱う場、神界。一般的に言う死後の世界ですね」

「へ～。じゃあ俺死んだんだ？」

「はい。死因は駅のホームに向かう階段で新羅（しらぎ）　北斗（ほくと）が足を掛けたことによって階段から落ちた事が原因です」

ああ、あの学年一の嫌われ者か。そういえば目を覚ます前にあいつのニヤケ面を見た気がする。・・・思い出したらイラッとしてきた

「私はアルミナ。大神候補生の一人です。今回はあなたにここの説明の為に来ました」

「大神候補生？」

「大神候補生はこの神界を治める大神の候補たちのことで、他にも沢山の下級・中級・上級神がいます」

「天使はいないんだ？」

「天使はこの神界の下、天界にいて、下級神のさらに下に当たります。天界は一つの世界に付き一つ存在しており、この神界はすべての天界と繋がっているのです」

「へ～。じゃあ、あの列は？」

「あれは転生待ちの者の列ですね。死んだ者は生前の徳と業、つまり善行と悪行の差に応じて列に並ぶんです。徳が業より高いほど前の方に、業が徳より高いほど後ろの方に並ぶことになってるんです」

「俺はどうなんだ？」

「そうですね・・・かなり前、いえ、すぐにでも転生できそうですね」
おお～生前ボランティアや募金、人助けを積極的に行ってて良かった～。・・・まぁ、それが原因であいつに嫉まれて殺されたんだろうな。
「他に質問はありませんか？」
「じゃあ、地獄って存在しないのか？」
「昔は業が深すぎる者に罪を償わせる場として似たような場所がありましたが、今は存在せず、魔界のみが存在します」
「その魔界は？」
「魔界は天界の正反対に位置し、天界と同じように世界の数だけ存在し、悪魔や魔族といったものが暮らしています。昔は全ての魔界が今言った　罪を償わせる場と繋がっていたんです。他に質問は？」
「転生ってどうするんだ？」
「下級神が力を注ぎ、持ってる徳を使い新たな肉体を生み出します。この生み出された肉体に入る前に生前の記憶とここでのが消されることになっています。他には質問はありませんか？」
「いや、もう大丈夫」
「そうですか。では列の前の方に行きましょう。手を握っていてください」
アルミナが差し出した手を握ると、俺と彼女の体が浮き上がり、列の前の方に向けて動き出した。

俺死亡、神界にて・・・2（前書き）

ちょっと長めです。

俺死亡、神界にて・・・2

「着きましたよ。ここが転生する魂の最前列です」
「・・・・・・」
・・・死ぬかと思った（死んでるけど）。手しか握ってないのにアルミナは猛スピードで飛ぶから何度落ちそうになったか・・・。しかもチラッと下を見てみたらこの列は想像以上に長く、その列がもの凄い勢いで後ろに流れていっていた。
「あの、他に方法は無かったのか？転移とか・・・」
「・・・あっ、忘れてました！」
うおい！そのうっかりで俺は死にかけた（死んでるけど）のか！
「ちなみにさっきの速度はどのぐらいだったんですか・・・？」
「え～っと・・・」
思わず敬語で尋ねると少し考えるような素振りをしニッコリ顔で言い放った。
「確か光より少し速いぐらいですね！」
ドサッ（俺が倒れた音）
「魂が消滅しなくて良かったですね！」
消滅！？光速を超えると魂が消滅する可能性があるのか！？
「謝罪を要求します！」
「・・・うるさいですね私自ら消しましょうか（ボソッ）」
・・・あれっ？何かアルミナさん（思わずさん付け）の口から恐ろしい言葉が聞こえたような・・・。
「それじゃぁ行きましょうか？」
「あ、はい。了解です」
きっとさっきのは空耳だ。そうに決まっている。そうであって欲しい。
最前列には扉とその前に二人の神が槍を持って立っていて、一人ずつチェックしてから通しているらしい。

「「アルミナ様、ご苦労様です！」」
「あなた達もご苦労様。次はこの魂をお願いしますね」
「「はい！お任せください！」」
アルミナがニッコリ笑顔で声をかけると、神二人は顔を赤くして返事をした。
「それじゃあ私は次の仕事があるのでこれで」
最後にそう言葉をかけ、アルミナは再び猛スピードで飛んで行った。
「それではお通り下さい」
神一人が俺に許可をくれ、もう一人が扉を開けて俺を通す。
扉の先には廊下が続いていて、その先にはまた扉が見える。廊下を進むとすぐに後ろの扉が閉じ、後戻りできなくなったのでひたすら歩き続ける。
扉を開けると中は広い部屋で、床一面に巨大な魔方陣の様な物と魔方陣の中心に（見た目は）若い青年の姿をした神がいた。
「おう、次はお前か。さっさとしろこのノロマ」
・・・なんて神だ。口調と目付きがあの新羅と同じ他人を完全に見下しているものじゃねぇか。　俺はさっさと済ませるために無言で近づき奴の二、三歩前で立ち止まった。
「そんじゃ早速」
その神が言った瞬間、床の魔法陣が輝き、俺の中から“何か”が抜け、神の目の前で止まる。
「ほう、結構徳があるな」
小さくそんなことを呟くと今度は神からじわじわと“何か”が俺から出た何か（恐らくあれが俺の“徳”）と混ざって発光し始める。
光の中でどんどんそれは形作り、それが人型に近づくほど光が弱まっていき、完全に光が消える。
瞬間、
「ヘックショーイ！！」
かみがくしゃみした。

勢いよく神から何かが流れ出て、人型になっていたものに流れ込む。するともの凄い光量を発し、光が収まるとそこには何も無かった。

「・・・はっ？」

上下左右前後、３６０度部屋を見渡しても何も無い。俺は神に視線を向ける。すると神はあっけらかんと言い放った。

「わりぃ。お前の躰、消滅した」

「・・・何ぃ――――――――――！！」

部屋一杯に俺の叫びが響き渡り、俺は神の襟首を掴みあげた。

「いったいどうゆうことだ！！」

「うるせぇ。離せカス」

神は俺の手を外し、煙草を吸い出した。

「説明してやるから感謝しろよ。お前の徳に俺が力を注いでいたんだがさっきのクシャミでうっかり力を注ぎすぎて俺の力に耐えきれなくなったお前の躰は消滅した。以上」

「１００％てめぇの所為じゃねぇか！俺はどうすんだよ！」

「決まってるだろ。転生できない」

「・・・な、に？」

「当たり前だろ」

そう神は前置きして煙草を携帯灰皿に入れた。

「転生するには“徳”が必要だ。が、お前の徳はさっきので無くなった。徳が無ければ新たな肉体が作れない＝転生できない」

「じゃあ俺はどうなんだよ！」

「決まってるだろ？その内消滅する」

「な・・・・！」

「ほら、さっさとどこかへ消えろ。後がつっかえてんだよ」

神は俺に『シッシッ』と手を振り背を向けた。その瞬間プッツンと、俺の中の何かが切れた。

「・・・な」

「あ？何か言ったか？」

新羅の野郎に殺されて、生前の行いによって転生できる早さが違うと言われて俺のやっていた事が無駄じゃ無かったと思っていたら新羅と似た性格の神の所為で転生できず消滅を待つだけだと？

「っざっけんな――――――――――――！！」

俺の拳が振り返った奴の顔面に直撃し、奴は衝撃で床を滑った。

「がっ・・・！てめぇ、神である俺に手を出しやがったな！！」

「うるせぇ！てめぇ、その顔原型が無くなるくらいボコボコにしてやるから覚悟しろ！」

もう一発ぶん殴ろうと奴に向かって全力で走るが奴も黙ってなかった。

「縛！！」

奴が叫ぶと同時に四方に魔方陣が現れ、そこからさらに鎖が飛び出して俺を拘束する。

「くそ！離せ！」

「てめぇは神である俺に手をあげた罪で魔界転生の刑にする！」

「魔界転生だと！？」

「お前の業を使って魔界の住人に転生させる。これは俺の力は必要ない。魔界の住人は魔神に認められない限り転生できず、死ぬ事は魂の消滅を意味する。もっとも、今は魔神は存在しないがな」

「何ぃ！？ふざけんな！！」

それじゃぁただ消滅を待つだけじゃねぇか！！

「さらにお前には前世とここでの記憶を持たせたまま転生させてやる。二度々来れない神界と前世のことを思い苦しむがいい！」

「ちっくしょ――――――――――！！」

俺の中から現れる黒い“何か”。形を変えたそれに吸い込まれ俺は意識を失った。

人物紹介（序章）（前書き）

名前が出てきた二名のみ紹介

人物紹介（序章）

片桐　駆（かたぎり　かける）
性別・・・男
種族・・・人間
年齢・・・享年１７歳
身長・・・１７１ｃｍ
目・・・黒（ちょっと吊り目）
髪・・・黒（ちょっと硬めで上につんつんしている）
説明・・・本編の主人公。見た目はちょっと怖いが、趣味は家庭菜園にボランティアや人助けと良い人で町内の人気者。さらに料理等も一通りこなすことが可能。見た目のせいでよく因縁をつけられるため自然と強くなっていった。通学途中、駅のホームに続く階段で新羅　北斗（しらぎ　ほくと）に脚を掛けられ、落ちた時に脳天を強打したため死亡。葬儀では家族や学校の人間が多く参加し、皆涙を流した。

アルミナ
性別・・・女
種族・・・上級神（大神候補生）
年齢・・・???
身長・・・１６８ｃｍ
目・・・青（大きくパッチリしている）
髪・・・金（背中まで真っ直ぐ伸びている）
説明・・・神界の四人いる大神候補生（別名：四天王）の一人。いつも笑顔で神界でも一、二を争う美女。死んだ駆の徳が高かった為、転生待ちの魂の列の最前列に連れて行くために現れた。

俺誕生、魔界にて

目が覚めると、見たことがない天井だった。
「う・・・？あー？（あれ・・・？ここは？）」
・・・あぁ、そうだった。あのくそ野郎（神）のせいで魔界に転生したんだった。
・・・とりあえず自分の体を確認。
首を動かして左右を確認。視線の先には小さくてプニプニしてそうな手。意識して動かせば思い道理に動く。・・・両手確認よーし。
次に足・・・は見えないので手と同じように動かしてみる。とりあえず両足もちゃんと足の指まである様だ。・・・両足確認よーし。
どうやら一応両手両足のある生物のようだ。・・・これで顔がグロテスクな生物だったら嘆くしかないな。
「おや、目が覚めたか我が子よ」
声と同時にヒョイっと体が持ち上げられる感覚。真上には母親らしき黒髪の人間と同じ目・鼻・口・耳の付いた顔。
「あ～？（母さん？）」
「お～よしよし。我がお主の母じゃよ～」
吊り目がちな黒目が愛おしそうに俺を見つめてるのを感じ俺はこの人が母親であることを確信した。
その時、母さんの後方から突然ドタドタと足音が響き、母さんがそちらを向くとそこにあった扉が開き、
「シェリル！子供が起きたのかい！」
そこには薄緑色の毛で覆われた顔から二つの紫色の何かが見える男（声からして恐らく）が立っていた。
「おぎゃあああぁぁぁぁぁぁ！！（うぎゃあああぁぁぁぁぁぁ！！）」
「バカモノ！ぐずりだしたではないか！」
「ご、ごめん。でも、早く目が覚めた我が子と触れ合いたくて・・・」

「だから触れ合いたいのなら顔を隠している余分な毛を切っておけといったであろう！ほら！やってやるからこっちにこい！」
「い、痛い！髪を引っ張らないで！」
母さんが腕から俺を下ろし、父親（らしき生物）の髪（らしい毛）を引っ張り、扉から出て行った。
先程、母さんの後ろ姿が目に入った時、母さんの背中には悪魔の翼のような物が見えた（あと、父親らしき生物の背中にも）。
もしかしてと思い背中に翼があると仮定し、羽ばたくようにイメージしてみると背中で何かが動くのが分かった。・・・やっぱり俺にもあるんだ、翼。
ふわぁ～。・・・急に眠くなってきた。やっぱり赤ん坊だからか？

シェリルｓｉｄｅ
夫のメフィスの余分な毛を切り終え、我が子の部屋に戻ればぐっすり眠っておった。
「あ～眠っちゃった。抱き上げたかったのに・・・」
「だから常日頃から伸びてきたら切れと言うておいたであろう」
伸び切った毛を綺麗に除けば、そこからは紫色の瞳の穏やかな目つきの男が顔を現す。・・・普段からこうなら我も嬉しいのだがなぁ。
「どうだった？」
「瞳はお主譲りの紫だったの」
「髪はきっと君と同じ綺麗な黒色だろうね」
「どうかのぉ」
・・・ゆっくりお休み。愛しい我が子、アルヴィスよ。

俺、魔界の学校にて

俺が片桐　駆からアルヴィス＝ディフォースとなってから１７年。ようやく体が人間の頃に近づき、この頃になるともう翼がある生活も違和感も覚えないし“空を飛ぶ”という行為も日常になった。

俺の両親はどっちも悪魔（父親も悪魔と知った時は心底驚いた）で、母はシェリル＝ディフォード。黒髪に赤い瞳の凛々しい女性で、本人曰く、かつて魔界の将軍だったらしいが、本当かどうかは知らない。

父はハイル＝ディフォース。薄緑色の短い髪と紫色の瞳の穏やかそうな男性。研究が趣味で、一度部屋に篭もるとなかなか出てこず、食事の時は母さんが無理やり引きずり出す。たまに髪や髭を放置し、薄緑色の化け物になる。

俺の顔の造形は人間の頃とほとんど変わらないが、そのころとは違い、母さん譲りの黒髪は伸ばし、瞳は父さん譲りの紫だ。

魔界に転生して最も驚いたことはなんと学校があることだ。魔界中のは１５～１８歳の間の悪魔・魔族が集まり、魔力の使い方はもちろん、人間を襲い、恐怖のどん底に落とす方法などを学ばせている。学校は王都の近くに存在し、遠くの者たちは“ゲート”言う巨大な門型の転送装置で学校に通っている。

そして俺は・・・

「くぁ～～～。眠・・・・」

絶賛サボリ中だ。

元人間の身としては、人間を襲うつもりも無いし、恐怖のどん底に落とすつもりも無い。魔力の使い方は幼い頃、魔法の存在を知った時に独学で習得した。つまり、授業に出るつもりは必要は無い。そのおかげで俺は学校一の問題児として教師・生徒から軽蔑されている。

俺だって本当は学校に来るつもりなんか無いが、親から行くだけ

もするように言われているのと、友達の二人が心配だからだ。
ゴーンゴーンゴーン
「お、終わったか」
今のは授業終了の合図。授業の開始時は二回、終了時は三回なる。何故お寺の鐘のような音なのかは、『ベルだと神を信仰している協会と同じで気に入らない』と学校の創立者の私情らしい。
学校から昼食の為、何もの生徒が出てくる。楽しそうに話しているが、俺に気付くとこそこそ話し出した。
「見ろよ。アルヴィスだ・・・」
「たいした魔力もないくせに授業にも出ず・・・」
「落ちこぼれの分際で・・・」
以上、俺を見てこそこそ話し出した生徒の会話（一部抜擢）から。・・・毎度毎度俺を見て同じような話をして、よく飽きないな・・・。
そんな奴らを無視していると見慣れた姿が目に入り、歩き出す。同時に向こうも俺に気付き、こっちに向かって来た。
「よぉ、ハーシェ」
「やぁ、アル！」
こいつはハーシェス＝フェルマータ、通称ハーシェ。さっき言った俺の友達の一人で、種族は鬼族（オーガ）。短い水色の髪に、黒い瞳。額の少し上に斜めに生えている角に鬼とは思えない細い体に、男の俺から見てもかっこいいと思える顔。鬼らしさが角しかないが、こう見えても鬼族の族長の息子で、同年代の中で最も力のある男だ。ちなみに“アル”は親しい魔族が使う俺の通称だ。
「あいつは？」
「先にいつもの所にいるよ」
「うしっ、じゃぁ行くか」
俺とハーシェはあいつの待っている“いつもの所”に向かった。

おれ、いつもの場所で食事

いつもの場所・・・学校のすぐ傍の山の中にある泉に向かうとそこには見慣れた長い薄紫色の髪の少女が目に入った。

「よぉ、ルル」

「今来たよ」

「！アル！ハーシェ！」

彼女は俺たちに気付くと嬉しそうに手を振った。

彼女はルルティエ＝ミルドレア、通称ルル。彼女はこの魔界の第二王女・・・つまり魔王の娘だ。しかし彼女の性格は至って穏やか。人間を襲うことなど好まないが第二王女として他の悪魔や魔族に示しがつかないということで無理矢理この学校に通わされている。

そんな自分を押し殺して生活していたせいで精神的に参ってしまった時に、ここで俺とルルは出会い、同じ思いを持つ同士仲良くなった。

「よし！じゃぁお昼にしようか？」

「おぉ」「うん！」

俺達はお互いにそれぞれお弁当を鞄の中から取り出す。ハーシェは鬼族ということもあり、その見た目に似合わずお重を取り出す。ルルは逆に女の子なのであまり食べないということで小さめ。俺が二人の中間くらいの大きさのお弁当だ。

「アルのお弁当は相変わらずおいしそうだね」

「そうか？」

「自分で作ってるんだよね？」

「まあな・・・親に任せると酷い目にあうからな」

うちの両親どちらも料理ができない。母さんが作ると何故か爆発し、料理が調理器具ごと消し飛ぶ。父さんが作ると見た目は普通なんだが味がこの世の物とは思えないほどひどい味になる。

「私も自分で作りたいけどお父様と姉様が許してくれなくて・・・

」
「私は器具を壊してしまうからな。あっ、そのおかず貰っていいかい？」
「おう。じゃ代わりにこれ貰うぞ。ルルも何か交換するか？」
「あっ、じゃあこれとそれを交換しよ」
「ほいよ」
そんな感じでおかずを交換して談笑しているとふと思い出したことがあった。
「なぁ、あれについて何か進展あったか？」
尋ねると二人はすまなそうに視線を下げた。
「すまない。僕の家にはヒントになりそうなことが書かれたものは無かった」
「私も城の一般書庫を調べているけど今のところは・・・」
「そっか・・・」
俺達が調べていること。それは魔界の結界を突破して人間界に行く方法。
魔界は普段魔王の力が生み出す結界によって人間界と行き来が不可能になっている。この結界は魔王が人間界を攻める時に刻む痣が必要で、痣を持た無い者は結界に弾かれてしまう。
俺は人間界で色んなものを見て、触れてみたい！だがその為にはあの結界を突破する方法が無ければどうすることもできない。二人も手伝ってくれているが未だに方法は見つからない。
「ま、簡単に見つかるとは思ってなかったし、気長に探すさ。早く食おうぜ」
二人を促し、俺も食事を再開しようと手を伸ばした。すると
「やっぱりここにいたわね！ルル！」
聞き慣れた声が耳に入り、嫌々そちらを見れば金髪ツインテールの美少女が数人の美青年・美少女を率いて立っていた。
「姉さん・・・！」
そう、彼女こそ魔界の第一王女であり、次期魔王。さらにルルの

双子の姉のリゼット＝ミルドレアだ。

俺、第一王女と戯れる（前書き）

7月31日
魔法についてちょっと修正

俺、第一王女と戯れる

リゼット＝ミルドレア。ルルの双子の姉（似てないけど）で魔界の第一王女。通称

「よぉ、リゾット」

「『リゾット』じゃなくて『リゼット様』！いい加減にちゃんと呼びなさいアルヴィス＝ディフォース！」

「貴様！」

「リゼット様に失礼だぞ！」

「そうよ！」

「一般悪魔の分際で生意気よ！」

「・・・で、リゾ・・・リゼット、ルルに何の用だ？」

「「「「聞かなかったことにするな――――！！」」」」

「また『リゾット』って言おうとしたわね――――！」

「ＨＡＨＡＨＡ！キノセイダヨー」

「この・・・！」

俺が明後日の方を向いてそういうとリゼットとその取り巻きの怒りの気配が大きくなったのを感じた。

「・・・まぁいいわ。今日こそルルとハーシェスは私達と過ごすのよ！」

「・・・それは俺じゃなくて二人に聞けよ」

二人に視線を向ければ

「私はアルといる」

「私も二人と過ごすからお断りさせていただくよ」

あっさりとお断りの返事。

「・・・あんたの所為よ！」

「それはちょっと理不尽じゃぁ・・・」

「うるさい！『フレイムボム』！」

怒りの叫びと共にリゼット手のひらを向けると魔方陣が描かれ、

魔方陣の中心から火の玉が現れ俺に向かって放たれた。俺は弁当を持って右に跳ぶとさっきまで俺のいた場所で炎が爆発した。
「危ないだろ！弁当が焼失したらどうする！」
「いや、アル。普通お弁当より自分の身を心配しないかい？」
「うん」
「何を言う。折角の料理が勿体無いじゃないか」
「自分の命が無くなるよりマシだと思うんだけど・・・？」
ちなみに会話をしている途中でもリゼットの放つフレイムボムを躱し続けている。

～数分後～
「いい加減当たりなさい！」
「毎度言ってるだろ。痛いから嫌だ」
「この・・・！これで決めてやる！『全てを燃やす紅蓮の爆炎よ』」
お？詠唱を始めたか。でかいのが来るな。
上空に巨大な魔方陣が描かれ、火の玉が現れる。そこにさらに魔力が集約し、火の玉がどんどん巨大化していく。
ここで魔法について説明。
まず魔法には火、水、地、風、雷、氷、闇、光の属性が有る。魔界の生物は闇＋光以外の属性を幾つか、天界の生物は光＋闇以外の属性を幾つか宿す。また人間界の生物は通常、光と闇以外の属性を幾つか宿すか魔力自体が無いかのどちらかだ。魔力についての説明は後で。上記に属さない魔法で治癒、空間があり、この二つは魔力があれば得手不得手はあるが誰にでも使える。また、どの属性にも属さないその血族特有の魔法もある。
この宿す属性によって自分の得意な属性は決まる。また、宿していない属性は使えないことは無いが、宿しているものより非常に扱い辛い。
次に魔力について。これは魔法を使うのに必要な力で、魔界と

天界の生物は差はあるが魔力が無い生物はいない。人間界の生物のみ魔力を持たない者がいる。魔力は強力な魔法を使うほど減り、魔力が切れれば魔法を放てなくなってしまうが、しばらく休めば魔力も回復しまた使えるようになる。

最後に魔方陣。これは界によって大体決まっており、円の中に人間界はさらに円を、天界は四角、魔界は三角をそれぞれはめ込んだような模様をしている。この魔法陣が人のイメージを読み込み、魔方陣に流される魔力を変換させてようやく発動する。

魔法はイメージした魔法を魔力を使い魔方陣が具現化し、放つもの。この時詠唱することによってイメージがよりはっきりし、術が安定し、威力が通常より高くなる。だが、反対に相手にどのような魔法を使うかバレ、躱されやすくなるというデメリットもある。ちなみに詠唱は自分のイメージをより明確にする為の物なので決まった呪文というものは存在しない。

「『我が前に立ち塞がるものを薙ぎ払い、焼き尽くせ！エクス』」

詠唱が完成し、リゼットの手に生まれる火炎玉。それを放とうとした瞬間、

ゴーンゴーン

鳴り響く午後の授業開始の鐘。

「くっ！今日のところはこれくらいにしとくわ！」

そう言うと魔法を消し、校舎に向かって取り巻きを連れて走って行く。

「私達も行こう」

「うん。アル、また帰りに」

「おう」

ハーシェとルルも荷物を持って去っていく。残ったのは俺だけ。

「・・・寝るか」

これが俺の魔界での日常

俺、本を発見する

そんな日常を過ごしていると、いつの間にか学校を卒業して、それから１５０年経っていた。
ハーシェとルルとは今もよく会って報告しあっているがいまだ人間界に行く方法は見つからず、俺は今日も家事に精を出す。
「兄さん、これも使う？」
「おう、そこに置いておいてくれ」
「分かったわ」
食材を持ってきてくれたこの子はミリス＝ディフォース。２０年前に母さんが生んだ正真正銘血の繋がった俺の妹だ。容姿は若い頃の母さんそっくりの顔で父さんの譲りの薄緑色の髪の毛を伸ばしている。若い頃の母さんにそっくりなだけあって今では立派な美女で学生の頃も人気だったが人気が衰えることはない。だが好きな相手がいるようで結婚をも申し込まれることもあるが断っている。現在は俺がいなくなっても大丈夫なようにこうして料理を手伝わせながら覚えさせている。その甲斐もあって簡単なものなら安心して任せられるようになった。
「よし！あとは少し煮込むだけでいいか。ミリス、準備しといてくれ。俺は父さんと母さんを呼んでくる」
「分かったわ頑張ってください」
「おう」
近くに置いてある棍を持って母さんの部屋に向かう。

「・・・ふう」
母さんの部屋の前に着いた俺は精神を研ぎ澄ませる。
「・・・よし！」
意を決してドアを開けると同時に部屋の中から棍が突き出され、

それを持っていた棍で受け流すと母さんが棍を持って飛び出し、連続で打突を繰り出し俺はそれを受け流し続ける。
「ハッ！また、腕を上げたのぅ！」
「母さんも！腕は全然衰えない、な！」
「当たり前じゃ！ハァ！」
「セヤァ！」
お互いに同時に相手の喉元に突き出し、寸前で止める。
「・・・ご飯もうすぐ出来るぞ。俺は父さんを呼んでくる」
「では先に行ってるからのう」
母さんは棍を部屋に放ってリビングに向かい、俺はそのまま父さんの部屋に向かった。

「父さん、ご飯もうすぐ出来るぞ～」
父さんの部屋のドアをノックするが中から何の反応も無い。まぁ、それは予想通りだったのですぐに部屋に入ると父さんは机の前で何かを書いていた。
「父さん、ご飯だ、ぞ！」
「あ痛ぁ！」
何時も通り棍でぶっ叩いて集中力を途切れさせるが力を込め過ぎて本棚に突っ込んでいった。
「アル～、酷いじゃないか～」
「返事をしない父さんが悪い。もうご飯出来るぞ」
「あぁ、分かったよ」
父さんが部屋の外に向かい、俺も行こうとするが足元の本のタイトルに目が入った。
「『勇者の道筋』・・・？」
ふと気になって本を手に取って読んでみるとそこには俺の知りたいことが書いてあった。
「これは魔界の地図・・・まさか！？」

俺、皆と話す（前書き）

更新が遅れてすいません！それではどうぞ！

俺、皆と話す

ハーシェスside

「ハーシェ」

「ん？」

アルに急に呼び出されて彼の家に向かっていると、後ろからルルの声が聞こえたので振り向く。すると丁度彼女が地面に降りてきた。

「ルル、君も呼ばれたのかい？」

「はい」

「例の事について何か分かったんだろうか？」

「多分。早く行きましょう」

「ああ」

再び彼女は飛びあがり彼の家に向かいだした。私もその後を走って追いかける。数分後、見慣れた建物が目に入り、家の前ではアルの妹のミリスが立っていた。

「ミリス、彼に呼ばれて来たんだが・・・」

「兄さんから二人が来るのは聞いてます。どうぞ」

彼女がドアを開けてくれたので私達は家の中に入る。私達が入ると彼女はドアを後ろ手で閉める。

「兄さんは自室にいます。私もすぐ行きますから先に行っておいて下さい」

「分かった」

私達はミリスと別れ、彼の部屋に行く。

「アル、来たよ」

「お、二人とも来てくれたか。すぐにミリスも来るからもう少し待っててくれ」

入って来た僕らにそう言うとアルはすぐに先程から読んでいた本

に視線を戻した。私達も適当な場所に座りミリスを待つ。
少し待つとミリスが人数分のお茶を持って来たので、全員部屋の中央に集まる。
「まずこれを見てくれ」
アルが出したのは先程までアルが読んでいた本。タイトルは『勇者の道筋』。
「これは先日父さんの部屋で見つけた本だ」
アルが本を開くと片面には一本の線と数字が書かれた魔界の地図に片面には数字の横に何かが書いてある。
「これは？」
「初代勇者の通ったルートと勇者が起こした事。これだと？の地点、魔王城で『魔王、勇者に討たれる』って書いてるだろう？」
アルの言う通り、確かにそう書かれている。
「こんなことが第６４代目勇者の分まで書かれている。俺が注目したのは魔王城までのルートだ。この６４代目までのルートを別の地図にまとめてみたんだが・・・」
そうしてアルが取り出したのは線の引かれた魔界の地図。
「「「これは・・・」」」
「気づいたと思うがどの勇者も魔界への進入口が魔界の最西端なんだ。おそらくここが結界の最も弱い個所なのかもしれない」
「それじゃあ・・・」
「ああ。俺は一週間後にここから人間界へ向かう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5766u/

あくま（悪魔）☆DE☆元人間

2011年8月31日00時31分発行